

国際会議参加報告

«Свое» и «Чужое» в культуре

文化における「ウチ」と「ソト」の概念

山口涼子

日時：2015年3月16日ー17日

場所：ペトロザヴォーツク国立大学

会議：参加者は二日にわたって、文学、フォークロア学、言語学、音楽、美学、政治学など人文科学分野の各セクションに分かれて、「ヨーロッパ北部の民族における«Свое» и «чужое»（「ウチ」と「ソト」）の概念」を議論した。初めて、ペトロザヴォーツク国立大学で会議を開かれたのは1997年であり、今年は10年目を記念する国際会議であった。今日まで、すべての会議の組織者は、哲学博士にしてペトロザヴォーツク国立大学の指導者であるワシーリイ・ミハイロヴィッチ・ピボエフ教授（科学アカデミー会員、カレリア共和国功労学者）の意思を受け継ぐ教え子らによって編成されている。これらの会議で発表された論集は、総計200以上もの論文から成り立っている。国際会議としては小さな会議であった。しかし、モスクワやサンクト・ペテルブルグという大都市ではなく、カレリアの首都であるペトロザヴォーツクで開かれた会議ということで、まさに、「ヨーロッパ北部」としてのロシアを打ち出す会議であり、そこには、ウクライナ問題で揺れる現代のロシアをとらえた民族性とは何かを問う意義深い会議であった。

会議に先立ち、報告者はペトロザヴォーツク大学の日本語を学ぶサークルを訪れた。専任の日本語教師不在のまま、異なる学部から集まった学生たちが熱意をもって自主的に勉強に励んでいた。学生たちがいかに日本語を学び、いかなる環境を望んでいるかを知る機会となった。日露文化交流が益々盛んになることを祈るとともに、報告者もできる限り援助したかった。



写真は日本語サークルに通うペトロザヴォーツク国立大学の生徒たちと報告者

概要： «Свое» и «Чужое»（「ウチ」と「ソト」）という概念は、ヨーロッパ北部の多民族国家において、相互に作用しあう様々な文化の層を「文化の対話」として理論的に解いていくうえで重要である。このペトロザヴォーツクという土地は、様々な民族の交流（もとより現地に住んでいた民族と新しく開拓した民族との交流）によって築かれた街であるからである。参加者たちは、ペトロザヴォーツク、モスクワ、サンクト・ペテルブルグ、ムルマンスク、アルハンゲリスク、コストロマ、クルスク、サランスク、クラスノヤルスク、ペルミ、チュメニ、ゴルノアルタイスク、バクー、ミンスク、ブレスト、ブダペスト、リガなど国内外から集まった 60 名ほどの学者、大学院生、学生たちであった。

印象： «Свое» и «Чужое»（「ウチ」と「ソト」）という概念は、フォークロアにおいて重要な役割を果たしている。例えば、А.К.Байбурин バイブーリン、Л.Г.Невская ネフスカヤらによると、その概念は他界観念と結びつく。代表として、葬礼という儀礼は、「ウチ」と「ソト」の二つの空間構成から成り立っており、それは「生」と「死」を分けることから始まる。スラヴの文化の多くがこの二項対立によって説明され得る。従来ではこのような議論が活発であったが、今会議では、従来のロシア伝統の文献学ではなく、現代の政治を交えた視点で論じられた発表が多かった。例えば、「ペトロザヴォーツクが他者にとってどういう街か」、「カレリアという土地の特殊性」、あるいは「革命を支持するロシア国籍の外国人のヨーロッパ像」などである。会議では、あくまでカレリアはヨーロッパの北部の民族であることが前提であった。他のセッションの会議においても、「フィンランドにおけるロシア人とロシアにおけるフィンランド人についての問題」や、「愛国主義文学における«Свое» и «Чужое»（「ウチ」と「ソト」）」など、政治的言及も多かった。

報告者は従来通りの他界観念と、カレリアにまつわる婚礼の文化を取り上げた。

政治的問題をあえて意識して言及しなかったわけではないが、報告者のテーマは一貫してこの地の婚礼泣き歌であったからである。

今回の会議で、特に、ミハイル・アレクセエフスキイ氏の発表は興味深かった。氏は、カルーガという新興都市が、外資による経済的發展を受け、第二のデトロイトと呼ばれるまでに成長したこと、中でも外国人の移民によって新しい文化的發展にあることを紹介した。そして、フォークロアが移民たちの文化交流に大きな影響を与えていることを指摘した。例を挙げれば、フランス人の移民による、ロシア民謡のアンサンブルの活躍である。フォークロアが人々の友好に役立っている例である。氏の発表は、Алексеевский Михаил Дмитриевич – Особенности восприятия иностранцев в современной городской культуре Калуге ミハイル・ドミトリーエヴィッチ・アレクセエフスキイ「現代都市カルーガの文化を独自に受け入れる外国人たち」(意識)という題で発表された。愛国主義的な色に染まらずに、フォークロアを幅広い視点でとらえた氏の発表は斬新であった。

報告者の発表：報告者は«Баня как сакральное пространство в свадебных причитаниях и мифологических рассказах»「婚礼の泣き歌と神話物語における聖なる空間としての蒸し風呂小屋」という題で発表をした。民衆の観念において婚礼に催される баня「蒸し風呂小屋」の果たす役割を空間的に論じたものである。この発表は、報告者の博士論文『ロシアの泣き歌に見る他界の詩的表象』を補う内容であり、ロシアの北の地セーヴェルにおいて特徴的な、この世とあの世の境界的空間である баня が神聖な空間として信仰されていることを証明した。

会議では、参加者による新しい本のプレゼンテーションがあり、報告者も昨年自費出版した拙訳『トゥオネラの悲しい唄』(原題 «Поэзия печали. Карельские обрядовые плачи» 「悲しみのポエジー・カレリアの儀礼的号泣」)を紹介した。ウネルマ・セミョーノワ・コンカが1992年にロシアで出版したカレリアの泣き歌を日本語訳したものである。もともとは、1970年代の前半にロシアで出版を予定されていたが、ソビエト政権下で日の目を浴びることのなかった貴重な本である。カレリア人にとってこの本が民族の誇りであることが伺い知れ、翻訳の続編への意欲につながった。

残念ながら、日程の関係上、すべてのセクションの聴講をすることは叶わなかったが、会議を終えてからも参加者と交流は続いており、会議のおかげでより深くカレリアという土地の文化や歴史を知るきっかけになった。以前までは気が付かなかったが、カレリア人もロシア人も自分たちの民族性の違いを主張しており、フォークロアの中においても、これは決して混在させていけない問題であることを痛感した。



写真は翻訳のプレゼンテーションをする報告者

今回の会議の成果は、すでに «Свое» и «Чужое» в культуре. Материалы X Международной научной конференции. Г.Петрозаводск, 16-17 марта 2015 года. Под ред. Н.Г.Ураванцевой ; М-во образования науки РФ, ПетрГУ.- Петрозаводск : издательство ПетрГУ, 2015.-207с. 『文化における「ウチ」と「ソト」ペトロザヴォーツク国立大学国際学術会議 10周年の資料』という論集として出版されている。

謝辞： 報告者が、この助成のおかげで、再び国際会議に参加できましたことは、報告者の見地を広め、大きな支えとなりました。この場を借りて深く御礼申し上げます。また、日露交流に少しでも携われたことは、報告者にとって新しい一歩となり、大きな喜びでした。これからも真摯に努めます。ありがとうございます。

以上

文責：山口涼子

写真提供：マリヤナ・ヤナ